

大学1年生に対する「体験的コミュニケーション理解プログラム」の 試行と体験の意味の検討

—自由記述の質的分析から—

佐野 真紀 (愛知教育大学 福祉講座)

要約 本研究は、「介護福祉士版体験的コミュニケーション理解プログラム」の作成に向けてプログラムを試行し、参加者が体験したことの意味を検討することを目的としている。入学7か月後の大学1年生を対象にプログラムを実施し、事後アンケートでプログラムの経験について尋ね、自由記述の回答を質的統合法によって分析した。その結果、本プログラムは、他者が【自分と違う】世界を感じていることや【表現の違い】を知り、さらにその違いを【違っていい】と肯定すること、コミュニケーションに大切な【共感のための姿勢】や【内側を見つめる】態度に気づくことを、参加者にもたらしていることがわかった。また、共感概念に照らし合わせて検討した結果、「体験的コミュニケーション理解プログラム」によってもたらされる経験は、違いを意識することから出発しながら、認知的共感や共感的配慮についての気づきをもたらしていることが示唆された。

キーワード：共感 コミュニケーション 体験的理解 描画

I. 問題と目的

1. 研究の背景

本研究は、介護福祉士版コミュニケーション体験的理解プログラムを構築する研究の一環として、「体験的コミュニケーション理解プログラム」を試行し、参加者が体験していることの意味を検討することを目的としている。

「体験的コミュニケーション理解プログラム」は、著者が2019年に行った高校福祉科5年経験者対象の研修をもとに考えられている。この研修は、高校福祉科の生徒が実習において利用者とのコミュニケーションに困難さを感じているほか、三年間同じメンバーで学校生活を送る中で人間関係に悩むことや、その影響で演習や実習に配慮が必要になっていることについて取り組みたいとの要望から、高校福祉科の教諭5年経験者を対象に、人と共に生きるということの体験を目指して構成した。このプログラムはその後高校福祉科で生徒を対象に実施したほか、社会福祉士養成課程の大学においても、ソーシャルワーク演習の中で実施した。しかし、プログラム評価についてはまだ十分に行えていない。今後、上記のプログラムをもとに「介護福祉士版体験的コミュニケーション理解プログラム」を構築し実施していく計画であるが、実際にこのプログラムが参加者にとってどのような体験をもたらしているのかを検証する必要がある。

「介護福祉士版体験的コミュニケーション理解プログラム」では、共感、受容、共感的理解などのコミュニケーションにとって重要な概念を体験的に理解することを目指しているが、参加者が実際にどのような体験をしており、上記の概念に照らし合わせたときに何をもちかしているといえるのかを検討していきたい。

本稿においては、特に共感概念について検討していくこととする。佐野(2022)では、介護福祉士養成における共感概念のとらえ方について文献研究を行った。各文献における共感概念の定義の分析から、介護福祉研究において共感概念は心理学から引用されることが多く、特に調査研究においてはDavis(1983)や角田(1994)の尺度を用いているものが多いことから、心理学に基づいた尺度を用いて共感を他者理解の基礎となる認知的・情動的構成概念としてとらえていることが明らかとなった。一方で、介護福祉研究においてもソーシャルワーク研究においても、共感を神経生理学の立場からとらえる文献も見られた。ただし、身体的共感を尺度に反映させるのは難しく、発展途上にあることがわかった。(梅田2018)

共感概念のとらえ方は幅広いが、本研究では広義にとらえているZakiが指摘する定義を採用する。共感とは、気持ちを共有すること、人の気持ちについて考えること、配慮することなど、人が人に対して示す様々な反応を含む包括的概念である。(Zaki = 2021 : 307-311) Zakiは、認知的共感と情動的共感に加え、動機的共感(共感的配慮、コンパッション)を含めて幅広く共感概念をとらえていることが特徴である。

プログラムが参加者にもたらす体験のうち、共感概念に結び付く体験があるかについても検討していく。

2. 研究の目的

本稿では、「体験的コミュニケーション理解プログラム」が参加者にどのような体験をもたらしているかを明らかにすることを目的とする。さらに、その体験が共感概念に結び付く体験になっているかについてZaki(=2021)に示されている共感の定義に基づいて検

討していく。

II. 方法

1. 調査協力者

入学から7か月が経過した大学1年生20名を対象に、ソーシャルワーク演習Ⅰの授業の一環として体験的コミュニケーション理解プログラムを実施し、事後アンケートを依頼した。アンケートは任意であること、アンケートの内容は評価に関係しないことを、口頭と文書で伝えた。分析の対象となったアンケートは18であった。

2. 調査内容

プログラムに参加した学生には、ウェブサイトを通じて「プログラム事後アンケート」を行った。調査項目は、絵の感想、メンバーの感想を聞いて、絵を描いての感想、メンバーの絵を見て、絵を重ねた感想、全体の感想の6項目であり、これらについて自由記述で回答するよう求めた。

3. 分析方法

本研究ではアンケートの自由記述を分析の対象とするため、山浦(2018)による質的統合法に基づいて分析を行う。自由記述の内容を要約する特徴的な言葉でコード化し、それらをカテゴリーに分けることによって概念化していく、KJ法に基づいた分析手法である。今回はデータが短文であり、かつ小規模であるため、それぞれの質問項目ごとに分析を行う。

4. 体験的コミュニケーション理解プログラムについて

検討に先立ち、プログラムの内容について述べておきたい。このプログラムは、5人程度の小グループに分かれて行う。前半は講師からの問いについてグループディスカッションを行い、その内容を発表した後に解説を行うという、対話的内容になっている。(問いの内容は対象者によって変えている。介護福祉士養成課程の生徒を対象にする際には介護をテーマに、社会福祉士養成課程の学生を対象にする際には傾聴やコミュニケーションをテーマに進めている) 続けて、「明るく在ること」についての対話を行い、その解説の後、休憩をはさんでから後半のプログラムを行う。今回の検討の対象となっているのはプログラムの後半部分の活動についてである。プログラムは以下の手順で行う。

① 1グループにつき3種類の絵を1枚ずつ渡し、テーブルの中央に置く。3つの絵を15分間無言で見よう指示する。絵の置き方は縦横どちら向きでも良い。また、自分が移動しながら見てもよい。

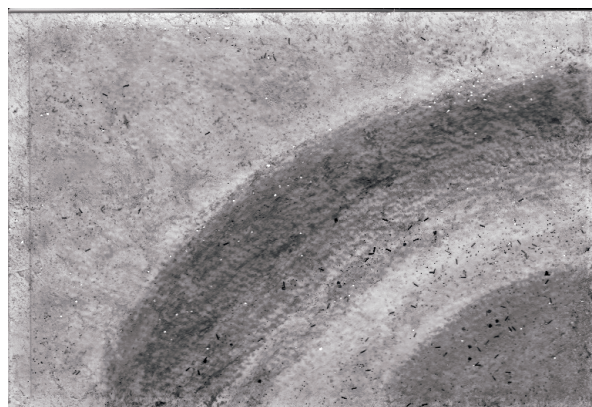


図1 3種類の絵①(元本カラー)



図2 3種類の絵②(元本カラー)

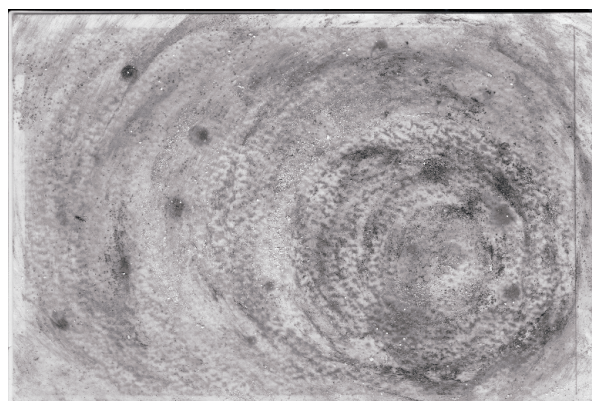


図3 3種類の絵③(元本カラー)

②グループで感じたことを声に出して語り合う。5分から6分行う。

③3枚のうちの1つの絵を見ながら、感じたことを絵に描く。時間は一つの絵につき5分から7分とする。これを3回繰り返すが、3回とも違う絵を見ることも、同じ絵を見ることも自由とする。絵を描いている最中は無言で行うよう指示する。

④絵を描いた後、絵について全員で話し合っ、その違いを感じてみるよう指示する。5分から7分行う。

⑤自分の描いた絵のうち2枚を選んで重ね、光にかざして眺める。上下を変えたり、組み合わせを変えたりしながら違いを確かめる。感想は適宜シェアする。

⑥グループのメンバーの絵を借りて自分の絵と重ね、光にかざして眺める。5分間、上下を変えたり、組み合わせを変えたりしながら違いを確かめる。感想は適宜シェアする。

⑦感想について全体にフィードバックし、まとめる。

これらの内容を、90分授業2コマ分で行う。

Ⅲ. 結果

今回のプログラム事後アンケートでは、3種類の絵を見て感じたことを話し合う、1つの絵を見て感じたことを絵で表現する、描いた絵を見て話し合う、自分の絵と他のメンバーが描いた絵を重ね合わせて眺めるという4つの活動について質問している。これらの質問項目をそれぞれ<メンバーの感想を聞いて><メンバーの絵を見て><絵を重ねた感想><全体の感想>と名付け、それぞれの項目ごとに自由記述の回答の内容を要約できる特徴的な言葉でコード化し、カテゴリー化²した。以下では、質問項目を<>、コードを[]、カテゴリーを【 】、カテゴリーを集約した概念を{ }で括弧で表記する。

<メンバーの感想を聞いて>では、8つのコードが抽出され、4つのカテゴリーが生成された。[感じ方が違った][視点が違った][考えていたことが違った]から【自分と違う】というカテゴリーが生成された。全体の68%がこのカテゴリーに分類される内容を記述していた。[面白い][似た考えに親近感][納得と驚き]から【肯定的な反応】が、[表現の仕方が違う]から【表現の仕方】が、[共通点と相違点]から【比較】が生成された。

【自分と違う】に分類されたものが6割を超えていることから、自分の感覚と他者の感覚が違っていることに強く印象付けられていることが分かる。また、【肯定的な反応】に分類されているそれぞれのコードも、自分の感想とは異なる感想を聞き、そこから受ける印象や思考を表現しているにとらえられる。したがって、このワークで最初に意見交換する際には自分と他者との認識の違いを感じる経験になっているといえる。

<メンバーの絵を見て>では、11のコードを抽出し、6のカテゴリーが生成された。[発想の違い][自分と他人の世界は違う][様々な思い]からカテゴリー【自分と違う】を生成した。ここには自他の感じ方の違いを述べているものが分類された。[自分より表現がうまい][抽象的表現][表現の違い][想像力を働かせた表現]からは【表現の違い】カテゴリーを生成した。発想や考え方の違いではなく、表現方法に着目している記述がまとめられた。[違いを受け入れる]は、「自分と感じたことが異なっても他者の意見に納得できた」「全然違うことを思っているでも受け入れることができた」などの記述からコードが生成され、そのままカテゴリー化した。[似た感覚が嬉しい][面白い][考え方が分かる]

は、それぞれ一つの記述をコードとし、【違いを受け入れる】【似た感覚が嬉しい】【面白い】【考え方が分かる】とした。

ここで【自分と違う】に分類されたコードは、発想や視点、感覚の違いを述べており、【表現の違い】は表現の仕方の違いを述べている。【表現の違い】に入っている[表現の仕方の違い]のコードでは、「同じことを表しても表現の仕方に個性が表れている」「同じことを感じた人でもまったく違う絵になっていて不思議」「同じ感想でも表現が違って」などが述べられている。このことから、絵を描くことにより、同じような感想を述べていたが異なる世界のことを言っていたことが分かった、という体験をしたことがわかる。同じような感想から異なる絵の表現が生まれることを通して、相手の世界が自分とは異なることをさらに認識した体験になったと思われる。また、多くの人がそれらの体験を肯定的に受け止めていることが推測できる。

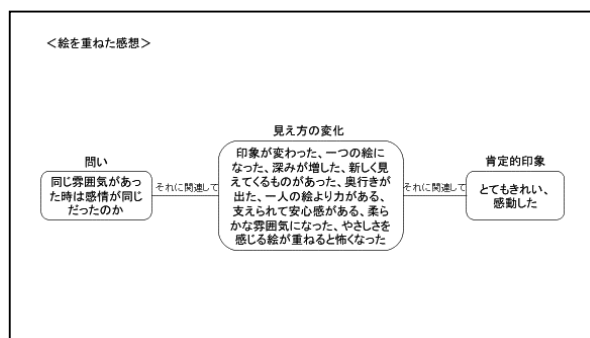


図4 <絵を重ねた感想>の見取り図 作成：佐野

<絵を重ねた感想>では、13のコードと3つのカテゴリーが生成され、【見え方の変化】【肯定的な印象】【問い】となった。(図4)【見え方の変化】は全体の78%のコードを占めており、[印象が変わった][新しく見えてくるものがあった][一つの絵にまとまった][深みが増した][奥行きが出た][一人の絵より力がある][支えられて安心感ある][柔らかな雰囲気になった][優しさを感じる絵が重ねると怖くなった]という9コードから生成された。【肯定的な印象】は[きれいな][感動][壮大な感じ]から生成された。【問い】は[同じ雰囲気があった時は感情が同じだったのか]というコード1つをカテゴリーとした。

【見え方の変化】に関連して、【肯定的な印象】は絵を重ねて眺めたことで新たに受けた印象を述べている。したがって、変化を感じているということでもある。二つの絵が重なり合うことで新たなものが生まれることを体験していると言える。これら2つのカテゴリーは、見え方の変化とそれについての肯定的な反応ととらえることができる。

<全体の感想>では、10のコードを抽出し6つのカテゴリーを生成した。カテゴリーは【違っていい】

【違っていて難しい】【内面を見つめる】【肯定的な心の動き】【身体感覚への気づき】【共感のための姿勢】となった。(図5)【違っていい】では「みんなちがってみんないいを体験できた」という記述に見られるように、違いを積極的に認める内容となっている。一方で【違っていて難しい】では「人によって感じ方、表現が全く違うため感じ取るのは難しい」という記述に見られるように、違っていることから相手を理解することの難しさを述べている。自他の感じ方や表現が違うことを感じ取ってから、最終的には相反する反応が見られた。また、【共感のための姿勢】は、【違っていい】に関連するものと考えられる。【共感のための姿勢】では、「人によって感じ方には大きな違いがあって、すべてが尊重されるべき」「自分の考え方に固執せず、他者の考え方に触れたい」「できるだけ相手をわかろうと興味を示すことが大切」という記述からわかるように、自他が違っていることから自分がどのように相手に向き合おうとするかを述べている。【違っていい】という肯定的認識から、違いを乗り越えて相手を理解しようとする動きに繋がっていることが読み取れる。【自分の内側を見つめた】は【価値観を見直せた】[自分の内側を整える][明るくいること]から生成された。絵から受ける印象を表現することを通して、自分の意識のあり方や価値観に気づいているほか、自分自身の感覚を感じることや冷静に表現することが、日常のコミュニケーションにおいて大切な要素になっていることに気づいている。これに近いものとして【身体感覚への気づき】を[足がつかず宙に浮いた感じ]から生成した。【自分の内側を見つめた】と【身体感覚への気づき】は、いずれも自分自身のあり方に意識を向けていることが分かる。【肯定的な心の動き】は[楽しかった][自分の世界が認められてうれしかった]から生成されており、<メンバーの感想を聞いて>において生成された【肯定的な反応】に関連していると推測できる。

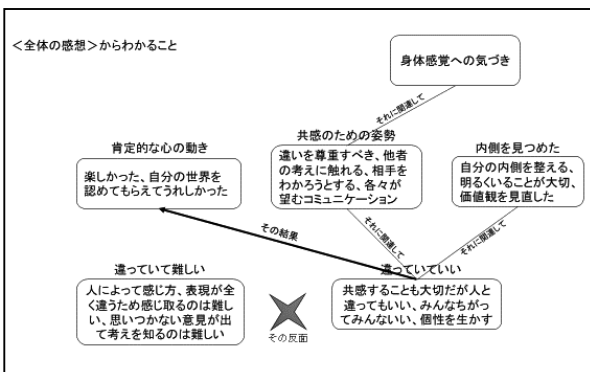


図5 <全体の感想>の見取り図 作成：佐野

IV. 考察

<メンバーの感想を聞いて>と<メンバーの絵を見て>では、似通ったコードが多く抽出され、この二つ

の問いに対する答えを総合的に見ると、【自分と違う】【表現の違い】【比較】は{自他の違いへの気づき}に集約され、【肯定的な反応】【似た感覚が嬉しい】【面白い】【考え方が分かる】は{肯定的な反応}として集約できる。また、【違いを受け入れる】は、そのまま【違いを受け入れる】とした。これらのカテゴリーの集約を図6に示した。ここからわかることは、3種類の絵を見て感じたことを語り合い、感じたことを絵に表現し、それを見せ合って語り合うことによって、{自他の違いへの気づき}を体験しているといえる。また、それに関連して{肯定的な反応}も示しており、同時に{自他の違いへの気づき}に関連して【違いを受け入れる】という姿勢も見ることができる。

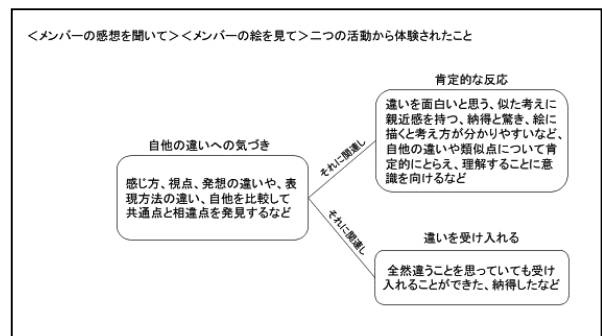


図6 二つの活動から体験されたこと 作成：佐野

次に<絵を重ねた感想>について考察する前に、描かれた絵を重ねることの意図を説明しておきたい。描かれた絵は、それぞれがある時点で感じていた感覚であり、描いた本人のその時点の状態を表している。その、ある時点のその人の絵が、ある時点の他の人の絵と重なり合うことで、二人の人が共にある状態を示唆している。それを眺めると二人のあり方は一人の時と比べてどのように感じられるかを体験することを企図している。

カテゴリーとしては【見え方の変化】【肯定的な印象】【問い】が生成されているが、78%が【見え方の変化】に含まれている。先にも述べたように、【見え方の変化】と【肯定的な印象】からは、二つの絵が重なり合うことで新たなものが生まれることを体験している様子が伺われる。この体験が<全体の感想>に何らかの影響を及ぼしていることが推測できる。さらに加えると、二つの絵が重なり合うことで新たなものが見えてくる体験は、協働= collaboration ということの意味すると考えられるのだが、今回の回答からはそこまで気づいているかどうかはわからなかった。

<全体の感想>で生成された6つのカテゴリーの関係性は図5の通りであるが、<メンバーの感想を聞いて>と<メンバーの絵を見て>の分析結果から作成した図6との関係性は、図4に示した絵を重ねる体験の影響を受けていると推測できる。以上のことをまとめ

ると、プログラム事後アンケートの自由記述の結果を図7のように表記することができ、以下のように叙述することができる。

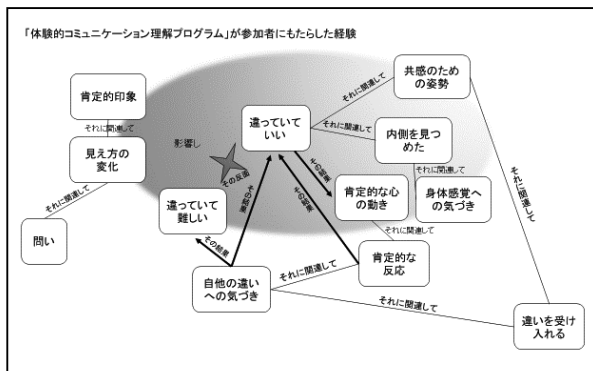


図 7 全体の見取り図 作成：佐野

3種類の絵を見て感じたことを語り合い、感じたことを絵に表現し、それを見せ合って語り合うことによって、「人によって感じ方が違って、同じ考えの人はいないと思いました」「同じことを感じた人でも全く違う絵になっていて不思議だ」という記述に見られるような【自他の違いへの気づき】を体験している。それに関連して「多種多様な考えが出て面白かった」というような【肯定的な反応】も示している。同時に【自他の違いへの気づき】に関連して「全然違うことを思っても受け入れることができた」というような【違いを受け入れる】という姿勢も見ることが出来る。これらの体験の後に自分と他者の絵を重ねて眺める体験を通して、「絵を重ねることで新しく見えてくるものもあった」「絵の組み合わせによって奥行きがある者になった」というような【見え方の変化】に気づき、関連して「違う絵を描いているのに重ねるととてもきれい」といった【肯定的印象】も見られた。これらの体験が影響して、＜全体の感想＞では、{自他の違いへの気づき}の経験から【違っていい】【違っていて難しい】と相反する評価がみられた。【違っていい】という認識の結果【肯定的な心の動き】が見られ、このことは{肯定的な反応}に関連していると推測できた。また、【違っていい】に関連して【共感のための姿勢】も見られた。【違っていい】という肯定的認識から、違いを乗り越えて相手を理解しようとする動きに繋がっていることが読み取れる。このことは、{自他の違いへの気づき}に関連している【違いを受け入れる】にも繋がっていると考えられた。【違っていい】に関連した【内側を見つめた】は【身体感覚への気づき】とともに自分の内側や感覚を感じ取る体験になっているといえる。

このプログラムは参加者に対して、他者が【自分と違う】世界を感じていることや【表現の違い】を知り、{自他の違いへの気づき}体験と、それに対する{肯定的反応}をもたらしていた。さらに自分と他者の絵を重ねて

眺めることで【見え方の変化】を体験した。このことが影響を与えて、自分と他者が【違っていい】と肯定することから、コミュニケーションに大切な【共感のための姿勢】や【違いを受け入れる】姿勢、【内側を見つめる】態度に気づくことをもたらしていたと言える。

では、これらの体験は Zaki(=2021) に示されている共感概念に照らし合わせると、どのようなことが言えるだろうか。Zaki は図8のような概念図を示し、共感の定義で示した「気持ちを共有すること、人の気持ちについて考えること、配慮すること」に含まれる専門的概念と、3つの事柄の関係を説明している。

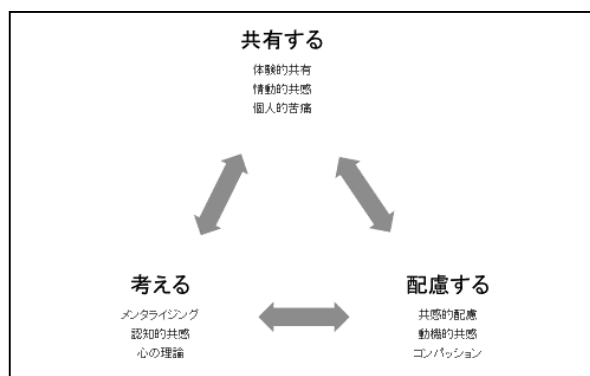


図 8 共感の概念図 Zaki, J.(=2021)

「共有する」は、体験共有、情動的共感と言い換えることもできる。体験共有は、他人に見た感情を自分の体験として受け止めることである。「情動感染」や「脳のミラーリング」もこれに含まれる。「考える」は、メンタライジング、認知的共感といった概念で言い換えられ、関連することとして心の理論が挙げられている。相手の行動や状況に関する証拠を集めて、どう感じているかを推測することである。認知レベルでの共感とは、他人の視点を具体的に想定するという意味で、「メンタライジング」と呼ばれる。「配慮する」は、相手の気持ちを考え、他人の幸せの状態を改善したいという意欲を抱く。仏教における「コンパッション（慈しみ）」の形式とも密接に結びついているという。(Zaki = 2021 : 309-311)

これらのことを踏まえたうえで、改めてプログラムが参加者にもたらしたものを直視してみると、他者が【自分と違う】世界を感じていることや【表現の違い】を知り、さらにその違いを【違っていい】と肯定することや、【違いを受け入れる】ことは、共感的配慮やコンパッションに繋がる姿勢であるといえるだろう。さらに、【共感のための姿勢】に分類されているコードには [違いを尊重すべき][他者の考えに触れる][相手をわかろうとする][各々が望むコミュニケーションを意識したい] などがああり、この内容は認知的共感に相当すると思われる。以上のことから、「体験的コミュニケー

「体験的コミュニケーション理解プログラム」によってもたらされる経験は、違いを意識することから出発しながら、共感についての気づきをもたらしていると言える。

V. おわりに

本稿の検討を通して、「体験的コミュニケーション理解プログラム」は、他者が【自分と違う】世界を感じていることや【表現の違い】を知り、さらにその違いを【違っていていい】と肯定すること、コミュニケーションに大切な【共感のための姿勢】や【内側を見つめる】態度に気づくことを、参加者にもたらしていることがわかった。また、共感概念に照らし合わせて検討した結果、「体験的コミュニケーション理解プログラム」によってもたらされる経験は、違いを意識することから出発しながら、共感についての気づきをもたらしていることが示唆された。この結果を踏まえて、「介護福祉士版体験的コミュニケーション理解プログラム」の構築を進めていきたい。

一方で本研究の課題もまた明らかとなった。今回のプログラムは試行ということで、参加者が少数であった。また、分析対象をインタビューの逐語録ではなく自由記述の内容としたため、ストーリーとしてのまとまりのないものを質的統合法で分析することになった。そのためコードとカテゴリーが十分にまとめられていないことが指摘できる。また同様の理由から、十分な概念化、理論化には至っていない。加えて、今後の計画ではさらに対象者が増えるため、調査方法の検討が必要である。今後これらの課題について検討しながら、さらに研究を進めていきたい。

註

- 1 「明るく在ること」は、支援者にとって基本的姿勢として必要なこととして説明している。明るいということはテンション高くいるということではなく、ポジティブシンキングということでもなく、落ち着いて現実を見つめることができ、その結果肯定的な現実のとらえ方から未来を作り出すことができる心のあり方といえる。
- 2 質的統合法では、コード化をラベルづくり、カテゴリー化をグループ編成と表現するが、本稿ではコード、カテゴリーという表現を採用する。

引用・参考文献

- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy : Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- 角田豊 (1994) 「共感性尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性類型化の試み」, *教育心理学研究*, 42, 193-200
- 佐野真紀 (2022) 「介護福祉士養成における共感概念についての一考察」 *障害者教育・福祉学研究* 18 巻, P97-102.
- 梅田聡 (2018) 「共感の理論と脳内メカニズム」 *高次脳機能研究* 第 38 巻第 2 号, 133-138
- 山浦晴男 (2018) 『質的統合法入門 考え方と手順』 医学書院
- Zaki, Jamil., (2019) : *The War for Kindness*. The Gernert Company, New York, (=2021, 上原裕美子訳『スタンフォード大学の教官の授業』ダイヤモンド社)

※本研究は JSPS 科学研究費 JP21K02546 の助成を受けたものです。